

Title	市民的国民経済学と社会主義的国民経済学との接近
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1911
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.5, No.1 (1911. 1) ,p.55- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110115-0055">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19110115-0055</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

54 是時に當り顧みて其君主本來の性質を明かにし、其國體の由て來る所を窮めんとす、また必ずしも無用の事にあらざるべし。唯だ余輩の淺學なる、果して自から之を窮め得たるや否やを疑ふのみ。

雜 錄

市民的國民經濟學と社會主義的國民經濟學との接近

高橋誠一郎

(一)

社會は洵にケトリーの言の如く當然破壊せらるべきものである。古い社會が崩壊して、其敗墟の上に新しい社會は建設せられて行く。偉大なる時の力は須臾息むとなく社會を破壊し、社會を建設してゐる。而して一時代に於ける社會の產物として生じた諸般の學説は、等しく亦社會の推移變遷に伴れて次第々々に其面目を改めて行く。變化は實にあらゆる有形無形の事物に取つて其通態であるが、然も近代の思想界の如く激甚なる變動を受けたるものはない。而して這般の變革中其最も著しいもの、一として擧ぐ可きは、經濟學上確定のもの

として認容せられた學説の基礎が動搖を來して其一般の傾向が甚だしく改まつたことである。

凡そ二世代の間。スミスやリカードに指導せられた經濟學は個人主義を目標として蕞地に進んだ。權威を以てあらゆる經濟的生活を律せんとするの時代は當に破壊せらる可き秋に逢著した。産業に關する智識が遙に時流に卓越し、能く産業制度の細目に互つて制規を與ふるに足る偉材は久しく世に出でずして、權威を要するものは凡庸魯鈍な國王や其官僚である。而して技術上及び經濟上の制規は既に時勢遅れと爲つた。國民は今や漸く其青年期を通過した。各個人の能力は益々發達して、漸次あらゆる拘束より解除せられんことを要求するの聲は高くなつた。斯くて新時代の氣運は國民を刺激して、自由放任を呼號し、獨裁專制の權力を排し、失政を非難攻撃する絶叫は社會の各方面に聞えた。此時代の潮流に棹差して來た十五世紀初葉の經濟學者は自由放任の利劍を眞甲に振り翳して、經濟生活上に於けるあらゆる古來の拘束を

撤廢し、權威の干渉を普く排除せんことを主張した。而して此傾向は彼等が主として社會に對し原  
子説流の觀察を有し、且つルツソーに教へられた  
淺薄な樂天主義を抱持して居つたが爲めに殊に誇  
張せられたのである。彼等の學説は單に一定の歴  
史的關係より演繹した推論に過ぎざるもので、決  
して經濟學上に於ける最後の斷案でもなければ、  
往々主張せらるゝが如く一個の科學として見る可  
きものでもないのである。

駁々乎として須臾も其進行を停止せざる産業革  
命の趨勢は偶々彼等經濟學説の實際的推論の大部  
分をして、殆ど其未だ構成せられざるに先立つて  
既に業に陳套なるものたらしむるの効果を齎し  
た。而して生産要素の使用を全然個人の自由に委  
するの制度が社會上頗る有害なる結果を及ぼすの  
事實は次第に明瞭と爲り政治家や實際家を驅つ  
て、經濟學者の誤つた警告を顧慮することなきに  
至らしめた。工場法の規定は一千八百〇二年以來  
(本誌第三卷第五、六號及び第四卷第一號所載)英

國工場法の淵源(參照)相次いで頑強なる經濟學  
者の反抗と戰つて議會を通過した。而して前代に  
於ける英國の法制は社會公共の安寧利益の爲めに  
私有財産權を制限するを目的とした一條不斷の記  
録として見る事が出来る。

(二)

其間に新たな國家觀が発生した。コント、ダ  
ーウイン、スペンサー等の方に依つて社會を以て  
一の有機體と爲すの思想は漸次に一般人士の心意  
に穿入して不知の間に普く其政治上の學説や理想  
に多大の變動を與へて居つた。完全なる都市は上  
流市民の利益を悉く代表したものにあらずして、  
他の準繩に律せられ、他の秤量に計量せらる可き  
ものであるとの觀念が漸次に認められて來た。當  
初はあらゆる拘束から脱離した個人的自由競争の  
福音として禮拜せられた進化論は今や全然相異れ  
る教訓を與ふるものとなつた。ハックスレーの言  
に據つて吾人は有機體は適者生存の理法を證明す  
可きものとしたならば、有害なる自由競争に代へ

て有意的に適用せられた並等共存を以てするも亦  
最も可なるものであることを學んだ。而して經濟  
學者と雖も此教訓に感化せられて居つた。あらゆる  
時代に於いて個人の上に卓越した社會有機體の  
根本思想は彼等の心胸に浸潤し、其講演に發露し  
て居つた。然も未だ彼等の一層苦心を凝した精緻  
なる研究には此種の感化が其形を表すことはさま  
で大なるものがなかつたのである。

然も社會主義の傾向は經濟學上の文書にも著し  
く之を認めるとが出来る様に爲つた。一千百四十  
八年に於けるジョン、スチュアート、ミルの大著經  
濟原論の出版は正に舊經濟學と新經濟學との境界  
を劃するものである。此ミルの大著は其版を重ね  
る毎に益々社會主義的の調子を帯びて來た。而し  
て遂に彼の死後に出版せられた其自敘傳は純然た  
る社會主義的の見地よりして、彼が單純なる政治  
上の民主主義を語勢を強めて明白に棄却した事實  
を世界に示した。爾來經濟學の進歩は頗る急速な  
るものがあつた。勞銀基金説の斷乎たる排斥、リカ

ドの地代に關する法則の發達及び擴張、並に漸  
次マルサス主義が變更せられ、且つ其重要の度を  
減ずるに至つたことは正統派の經濟學者と經濟學  
的社會主義との間に横はつた科學上の相違をして  
單に細目に互つた點と文字の末とに止まるに至ら  
しめた。斯くてアヴェリングの如き毫も社會主義  
的傾向を有せざる有易なる經濟學者をして、あら  
ゆる青年は今や幾多の大學教授と共に、悉く皆社  
會主義者たるの痛嘆す可き事實を江湖に訴へしむ  
るに至つた。ヘンリー、シヂウィックの如き最も  
細心な學者さへも、經濟學は社會主義と相背馳す  
るものなりとの、一般に誤られたる見解を是正す  
るの目的を以て一論文を公にし、却つて社會主義  
者の意見は從來認容せられた經濟學上の原則から  
出發した平易にして明白なる推論に過ぎざること  
を示してゐる。

英國經濟界に於ける這般の傾向は、同國に於け  
る社會主義者が決してカール、マルクスを盲信す  
るものにあらざるの事實に由つて一層其勢を助長

せられたるの觀がある。元より經濟史上に貢獻した彼の功績を承認し、人心の煽動家として、其偉大なる感化を知悉して居るが、之と同時に社會主義を主張する英國經濟學者の大多數は、純正經濟學に對する彼が特殊の貢獻を排斥してゐる。英國の經濟學界に於てはマルクスの價值學説は何人も之を信奉するものなく、スタンレー、ジエヴオンスの限界利用説が次第々々に勢力を收めつゝあるのである。社會主義者を標榜する二大組織即ち社會民主的労働黨及びフェビアン協會の領袖は孰れも少なからずマルクスの感化を蒙つて居るが、然る社會黨に名を列するものは彼等の社會主義的信仰を或る特殊の經濟學説から得たものではなく、個人所有權を認むるの結果として、地代若しくは利子として多額の支拂を爲すに至る明白なる實際の事實に其基礎を有して居る。英國の選舉人や爲政家が無意識に抱懐しつゝある社會主義の大部分は單に實驗的の觀察に基いたもので、毫も餘剩價値の觀念に動かされて發生し來つたものではない。

い。社會主義を奉ずる急進主義者中に在つて最も有力な經濟學説の感化は尙ほ依然としてジョン・ステュアート・ミルのそれである。正統學派の經濟學者なるフオックススウェルは曾て「吾人は一世紀間舊時の拘束から解除せらるゝと共に、賤劣なる一派の學者に由つて宛然たる宗教的神聖を授けられた個人主義の烈しい爆發の爲めに痛く煩まされて來たのである」と謂つて居る。經濟學者は充分に此産業上に於ける無政府的狀態が永く持續す可らざることを認めてゐる。中流階級に屬する普通の市民は尙ほ自由競争と個人的自由は社會制度の完成を致さしむる所以であると信じて居るが、然る經濟學者は孰れも皆這個の時代は其眼前に崩壊しつゝあるの事實を認めてゐる。之を要するに社會主義者の所謂市民的國民經濟學の發生地本據地と見る可き英國に於ける經濟學者の論調は最早「第三階級の法教師」たるの口吻を脱した。彼等の抱持する經濟學説に於ても、之を實際上に適用した經濟政策に於ても、慎重細心

なる社會主義者の主張と何等實質上の相違を認むることが出来ない様に爲つた。

(III)

斯くの如く經濟學者の間に著大なる變化を生ずると共に、二十世紀の曙光は科學的社會主義即ち所謂マルクス主義の根本的破壊を示したのである。マルクス主義の科學的基礎に對して根本的の改正を必要なりと見做す一團の社會主義者は漸く其勢力を得つゝあるのである。就中其最も傑出したものは謂ふまでもなくエドワード・ベルンスタインである。

エンゲルスはマルクスから其遺稿を出版するの使命を受けた、斯くて彼はマルクスの智識上の遺産相續人と爲つた。而してベルンスタインは其自ら稱するが如く更にエンゲルスの智識上の遺産を相續したものである。彼は其名著「社會主義の前提及び社會民主黨の職分」に於て「余は善く余の著書が幾多の重要な點に於て、其著述が余の社會主義的思想に偉大なる感化を與へたる（就中其

一人たるエンゲルスは曾に其死に至るまで個人としての友情を辱ふしたるのみならず、等しく又其遺書の整理を托して余に信賴する所大なる證左を示したる「マルクス及びエンゲルスの學説と背馳する所あるを知悉す」と稱してゐる。ベルンスタインの著に對して批判を下したカウツキーも亦彼の功績を承認し、其主張を論駁するに先ち、元と彼の學説の純正にして、其社會主義の弘布に誠實なることを證して居る。

ベルンスタインは其マルクス主義に對する批評の大部分は單に既に他の者の言説せる所を繰返したるに過ぎざることを認めてゐるが、然る普く之を列擧するは即ち現在及び過去に亘り、あらゆる國、あらゆる學派の社會主義者を悉く抱括するところとなり、餘りに煩しきを以て之を省ける旨を述べて居る。然しながら彼は此種の參考書目中には經濟學者の著書をも亦包含して居ると云ふ重要な事實を述べて居らぬ。而して彼の反對者たるカウツキーは諸般の場合に於てルロア、ボリユ一の

著「財富分配論」を引用し、彼が單に此著に依つて指示せられたる道を辿つたに過ぎざることを注意してゐる。カウツキーは云ふ「ルロア、ポリユー自身は明かに一個の市民的樂天主義者である、而して吾人が今や攻究しつゝある點に關しては實にベルンスタインの先驅者たる者である。此樂天主義者はあらゆる者を悉く楽しい光に照して觀察し、慎重に其道を摸索りつゝ大なる注意を以て進みつゝあるに過ぎざるに反し、社會主義者たるベルンスタインは苟も社會主義の理論に反對するの言説を弄するものならんには、其那邊より來りたるを問はず、何人と雖も喜んで之を歡迎するのである云々と。是に由つて觀るとベルンスタインの批評は決して創説と謂ふことの出來ないもので、寧ろ二十餘年以前より世上に唱道せられて居つた所のものと見ることが至當である。然らば縱令其敘述の才華と情熱とは明かに認められることが出來るとしても、其理論に於て従前の著者に比し寧ろ論證する力の少ない此著書が斯くの如く大なる聲

名を贏ち得たのは蓋し何の爲めであらう。マルクスタインに對する批評は經濟學者の手に試みられて居つた間は殆ど何等の注意をも惹かなかつた。然るに同一の批評が最も有力なる社會主義者の口から發せられた時、社會の注意は一時に喚起せられたが爲めである。即ちベルンスタインの著書から生ずる興味は客觀的よりは寧ろ主觀的に存するものである。其内容よりも却つて著者其人の人物及び經歷に存するものである。

(四)

然しながら吾人は茲にマルクスタインに對するベルンスタインの批評の大意を傳へ、彼が到達した結論を敘することも近時に於ける經濟學者と社會主義者との論點の接近を知る上に於て、強ち無用のことではあるまいと思ふ。

ベルンスタインは先づマルクスタインの唱道した社會主義の根本的基礎を論評し、所謂科學的社會主義の根底と爲せる原理原則に對して解説を試み明かに之を排斥しては居らぬが、然も幾多の修正意見

を含めてゐる。即ち此原理はマルクスタインの物質的歴史哲學と稱せらるゝもので、一般に彼の定則は其の全系統を此に發し、其學說即ち階級戰爭の教理、餘剩價值説、市民的生産及び其進化の傾向に關する原則は何れも皆之と共に運命を決せらる可き最も重要なものとして思惟せられつゝあるものである。

ベルンスタインは歴史哲學を説くに當り、其大に誇張せられたる事實並に人間社會進歩の上に作用せる經濟以外の要素の力を閑却すること餘りに甚しきに過ぎたるの事實を認めてゐる。而して彼は斯く他の要素を閑却したる理由は半ば政略上より來り、半ばは其教理の上より生じたものと看做して居る。斯くて彼はマルクス及びエンゲルスが其初年の著書よりは後年のものに於て此等諸要素の勢力を重要視すること少なきに至れるの事實を指摘して居る。而して自己の意見としてベルンスタインは「生産力並に生産條件の進歩に加へて各時代に於ける法律及び倫理思想、歴史的及び宗

教的傳説、人類の天性が其精神的歸向と共に一部を構成しつゝある地理的及び其他の自然的影響をも計上する」の必要を感じつゝあることを言明してゐる。

マルクスは其物質的歴史解釋に於て、あらゆる人類の發達は悉く皆生産及び交易に基いたものと爲し、大膽に歴史上に於ける精神的要素の影響を輕視し排斥して居る。斯くて基督教の傳來弘布、宗教改革、マホメット教及び思想界の他の方面に於ける文藝復興の發生發達は總て悉く人類發達の上に何等重要な要件として關與することなきものと爲るのである。然るにベルンスタインは曰く「如何なる歴史的物质主義も人類の歴史を構成するものは人類なること、人類は頭腦を有すること、並に其頭腦の傾向は常に經濟的事情のみに由りて動さるゝが如き器械的の物にあらざること等の事實より離れて其議論を主張するものにあらざ」と。加之、吾人人類は他の動植物と異り、全然物質的條件の爲めに支配せらるゝものではない、殊に人類

の欲望に自然の物質及び勢力を歸順せしむるを以て目的としてゐる經濟生活に就いて觀ても、吾人の成敗は悉く之に依頼して居るものと看做すことは出來ぬ。文明の進歩發達と共に吾人は愈々益々外界の自然をして自己の用に歸順せしむるの途を感得し、且つ或る程度までは自然的物質的の狀態を變化せしめて自己に有利ならしむるに至るのである。而してベルンスタインは「個人及び全國民は其生活をして彼等の意思に基かざるか若しくは之に反せる必至の勢力より遠ざかること愈々大なるに至らしむるものである」と説いてゐる。彼は明かに吾人人類が經濟的勢力の絶對的支配から一日と脱却しつつあるを感じて居るものである。

(五)

ベルンスタインは次いでカール、マルクスに偉大なる感化を與へた純主觀的論法の缺陷並にマルクス主義とブロンキー主義との關係を論じてゐる。一千八百二十年から一千八百五十年若しくは一千八百六十年に至る間に著しく其勢力を増加し

たヘーゲルの思想及び研究法は近時に及んで其會て保持して居つた威信を全然失墜した。而してヘーゲルの辨證方法を採用するに由りて、其思想に堅牢無比なる哲學的基礎を與えつゝあることを確信して居つた彼マルクスは却つて不安固にして永續の見込なき基礎の下に其學說を建設しつゝあつたのである。ベルンスタインはマルクスが形而上的の抽象論に昏迷せるを認め、歴史解釋に於ける「獨斷的意見」及び「自己暗示」の危険を云爲するのみならず、「最も明白なる事實を殆ど信ずること能はざる程等閑視せる」こと、「事件の眞意義を誤りて其輕重を妄斷せる」こと、並に近世的生活の必要條件を蔑視せると等の事實を指摘してマルクスを非難してゐる。

他の見地よりしてベルンスタインはマルクス主義が終に「革命的政運動並に其革命的剝奪の具體的形態に無限の創設力」を認むるブロンキー主義者の素朴單純な思想から全然脱離超出する所以を知らなかつた事實を聲明してゐる。

而して彼は同時に「エンゲルスが其晩年に臨み「階級争闘論」の序文中に於て、マルクスも彼も等しく政治的及び社會的進化の時期を推定するに際し、重大なる誤謬に陥れることを明確に認めたり」と記して、正統社會主義者其他彼に比して懷疑の分子の少ない集産主義者に満足を與へてゐる。

(六)

ベルンスタインは更に進んで近世的社會の經濟的發達を論じ、マルクスの原則よりも寧ろ其將來に對する預言を痛く攻撃し、彼が初期の著作を公にしてより五十年、而して彼の教理が其名著資本論の第一卷に論述せられてより早く三十年の歳月を經過したるが、其間に在りて實際上に於ける社會進化の趨勢は彼の預言せる所と全然相異れる方向を取れることを闡明してゐる。マルクスが苦心慘膽致々汲々として築き上げた學說、啻に無學偏執な民衆のみならず、思想界を擁塞阻礙する淺薄なる哲學者流の頭腦を支配して來た學說を根本よ

り破壊し去るものは此點に關するベルンスタインの批判である。

マルクス主義の大伽藍の支柱たるものは彼の價值觀念及び其價値の法則である。マルクスが自ら繰返し々々主張した如く、價値の觀念及び價値の法則なくんば、あらゆる經濟的現象の科學的智識を得ることは不可能である。ベルンスタインは先づ此マルクスの價値學說の意義に筆を進めた。彼は此學說が何等の實際的基礎を有せず、且つ又事實に徴して辯明の餘地を存せざるとを縱し明確に斷言することがなかつたとしても、確に自ら之を承認して居ることは明瞭である。彼曰く「正場に一貨物若しくは一種類の貨物を取つて考察した場合には、マルクスの所謂價値は悉く具體的の意義を失つて、單に純然たる抽象的の概念に過ぎざるものと爲るのである。然しながら斯くの如き條件の下に在つて、餘剩價値は如何なる性質を有するに至るのであるか。マルクスの教理に従へば餘剩價値は生産の労働價値と當該生産に使用せられ

たる勞働力に對する支拂との間の較差から成立するものである。果して然らば勞働價值が單に想像上の公式又は科學上の假設たるの外何等の意義をも有せざるものと爲つた其瞬間から、餘剩價值は正に一個の假設に基いた所言たるに過ぎざるものと爲るのである」と。這般の言はマルクスの價值及び餘剩價值の學說を正式に排斥したと同一の結果を有するものである。ベルンスタインは更に謂ふ「勞働價值の學說は勞働價值が常に資本主の爲めに勞働者の利用せられ絞取せらるゝ程度を計る尺度として認められ、殊に就中餘剩價值の配分は同時に絞取の配分を表示するの結論を誘起するを以て誤謬を招くの因と爲るのである。以上述べた所に據つて、縱令社會を全體として考察することが出來、且つ勞銀として支拂はるゝ總額が社會的収入の殘餘と對照せらるゝことが出來るとしても這般の尺度は正しいものでないと謂ふことが既に明白である。マルクスの價值學說は恰も原子説が彫刻物の長所又は短所を判定するに際し之が標準

たるの能力なきと等しく、勞働收益の分配に對し其正不正を判定す可き準則たるの能力なきものである。今之を以て標準と爲す時には所謂勞働者階級の貴族なる最高給の勞働者は之に由りて餘剩價值の配分頗る大と爲るを見る可く、之に反して最も下賤なる勞働に虐使酷遇せらるゝ勞働者は之に由りて餘剩價值の配分は最低のものとして爲るのである」云々と。

然しながら此點に關するベルンスタインの評論はさまで大なる注意を惹起することがなかつた。殊に彼が社會の注意を捕促し得たのは富の集中的傾向並に資本的生産破滅の避く可らざることを預言したマルクスの所說を批判したる點である。

(七)

マルクスは此點に關しても亦他と等しく自ら其學說を創唱した者ではない。彼は前人の所說を採つて之に細心精緻なる研究を加へ、而して後あらゆる可能なる形狀に於て且つ最も印象を與へ得可き方法を以て之を江湖に發表した。初めて十九世

紀の初期に當り新産業制度の下に在りて所謂富の集中的傾向並に之に隨伴せる賃銀獲得を目的とする勞働者階級の窮乏増加の理を構成したものは社會主義的の傾向を有せる經濟學者シスモンデである。彼曰く「扱て斯くの如くして富は少數所有者の手に集中するが故に、國內の市場は漸次狹縮せられ、而して商業は次第に其販路を國外市場に求むるの已むなきこととなつて、此に革命的の變動は生じ來るのである」と。此一文章中に産業上の恐慌第三階級を吸收し破壊す可き運命を有する金權政治に關するマルクスの全學說は其萌芽を發するるのである。マルクスは確かに此章句を知悉して居つた、而して彼の友人にして其智識上の遺鉢を傳へられたエンゲルスが彼の死後に出版した資本論第二卷の序文に之を引用したのは頗る奇と爲す可きである。

マルクスは富の集中的傾向を預定し、中産階級は大資本家の爲めに吸收せられ、大資本は財界の少數貴族の爲めに吸收せらるゝに至ることを主張

し、斯くて資本制度は自己の重量に堪えずして粉砕せらる可きものであるとの結論に到達してゐる。然るにベルンスタインは一般に破綻説として知らるゝ此學說は事實に徴して全然其虛妄なることを證明せられたること及び社會民主的信仰の誤謬を曝露し、富の集中は工業的企業との集中と歩調を等しくして行はるゝものにあらざることを闡明するに努めた。産業の集中と資産の集中とは事實上全く別箇のものである。兩者を同一視するとは甚しい思想の混亂と謂はざるを得ない。而して株式組織の會社企業發達の影響は資産集中の傾向と著しく相背馳せるの事實を示し、社會主義者が全く之を知悉せざるを遺憾と做して居る。彼は次いで數字を擧げて産業集中の傾向と全然獨立沒交渉なるを論じてゐる。彼は又英國に於て最も集中的大規模の經營行はるゝ棉花及び羊毛業に投入せられたる株式資本は非常に多數なる株主の間に分配せられ、而して各人の持株は比較的少數なるの事實を指摘してゐる。彼は所得税に關する調査報告

を引用して曰く「一千八百五十四年普魯西には、ラサールを繼ぐもの、熟知するが如く、一千五百圓以上の所得を有するものは、一千六百三十三萬三千の人口中僅に四萬四千四百〇七人に過ぎなかつたが、一千八百九十四年から同九十五年に至る年度の間に一千五百圓以上の所得を有するものは三千三百萬の全人口中三十二萬一千二百九十六人と爲り、更に一千八百九十七年より同九十八年に至る年度には三十四萬七千三百二十八人に増加してゐる。即ち人口の陪加する間に。満足なる生活營みつゝある者の數は七倍に増加してゐる。而して一千八百六十六年に併合せられた地方に於ては舊普魯西の本土に比して相當以上の所得を有する者の數多きことを認め、且つ又生活資料の價格は此期間に著しく騰貴したるの事實を參酌するも、尙ほ全人口に對する相當以上の生活を爲しつつある者の比率は一に對する二の割合を以て増加したることが明かである。更に長期間に就いて觀察すると一千八百七十六年から一千八百九十年に

至る十四年間に納稅者總數は二割五厘六毛の増加を爲せるに一千圓乃至一萬圓の所得即ち安樂なる生涯を送りつゝある市民及び小市民階級は三割一分五厘二毛の割合を以て増加してゐる。所謂資産階級即ち三千圓以上の所得を有する者の數は同期間内に五割八分四厘七毛の増加を爲した。此増加の六分の五は三千圓から一萬圓に至る相當の所得を有するもの、増加に基くものである。這般の比率は獨逸聯邦中最も工業の發達せる索遜に於ても亦同一である。同國では八百圓乃至一千六百圓の所得を有する者の數は一千八百七十九年に六萬二千四百四十人なりしものが、一千八百九十年には九萬一千二百二十四人に増加し、一千六百圓から四千八百圓に至る所得を有する者の數は同一期間に二萬四千四百十四人から三萬八千八百四十一人に達してゐる」云々と。

普魯西及び索遜兩國の所得稅統計から引用した是等の數字は中流階級漸次に消滅して貧困窮迫の増加を見るに至るは正に資本制度の避く可らざる

結果なりと倣すマルクスの學說が毫も確實なるものにあらざるの證左として見る可きものである。

斯くてヘルンスタインは之を概括して曰く「現代に於ける經濟上の發達は單に相對的のみならず絶對的にも亦資産所有者の數を減削するの傾向ありとの主張は徹頭徹尾誤謬である。彼等の數は絶對的にも相對的にも共に増加の勢を示してゐる。若し社會民主政治の運動及び將來の希望が資産所有者數の減退に基礎を有して居るとしたならば、それは正にあらゆる希望を拋棄しなければならぬことと爲るのである」と。彼は「絶えず其數を減じつゝある少數の大資本家に由りてあらゆる剩餘價値を吸收せらるゝに至る」との思想を以て妄信謬見なりと倣してゐる。(次號完結)

### ヘルマン、ハインリヒ、ゴツ

#### ゼンと其學說

生誕一百年記念の爲めに

小泉 信 三

主觀的價值學說最初の代表者の一人として、又限界利用說の鼻祖として今日の經濟學者はヘルマン、ハインリヒ、ゴツゼンの名を知る。而かも彼の生涯及び其爲人に就ては一般に多く教へらるゝ所なし。コンラッド「國家學大辭典」エルスター「國民經濟辭典」は屢々古代無名の學者の爲めにも一項を割く事を惜まざるにも關らず、ゴツゼンの名は遂に開却せらる。「コンラッド」辭典最新第三版は短き小傳を掲ぐ。即ち彼は正に理論經濟學者の列中に數へらる可くして未だ其事なかりしなり。今や彼れ死して五十年、其書出で、六十年、而して彼が生誕の時より正に一百年を経たり、茲に彼の生涯と其著述に就て少しく誌さんとするは全く其機會に非ずと云ふ可らざるなり。